

コラムー中小私鉄における路線の廃止

1. はじめに

ここまで第2部ではJR各社の路線を事例研究の対象として扱ったが、その他にも日本には多くの鉄道会社と多くの路線が存在している。本稿は、コラムという形でそういったJR各社以外での存続・廃止問題を2件取り上げ、その対象となった路線に関して、①で路線のデータを示し、②で現在までにどのようなことが路線を取り巻くこととして起こったのかを簡単に表し、③存続・廃止の要因となったであろうことを考察する。

対象とする路線は、上田電鉄別所線と長野電鉄屋代線であるが、選択した理由は廃止問題の浮上した時期が比較的近く、両線とも長野県内に路線があり、結果が対照的であったためである。

2. 事例①上田電鉄別所線

①路線概要

所属：上田電鉄(上田交通) 路線長：11.6キロ¹

区間：上田～別所温泉間 駅数：15駅 廃線対象区間：全線

②廃止問題の経緯

2000(平成12)年から2001(平成13)年にかけて相次いで発生した京福電鉄の事故を受け、2003(平成15)年より上田交通別所線で「安全性緊急評価」が行われた。これを受け2004(平成16)年には老朽化した鉄道施設の更新などのために、10年間で11億3100万余円の整備費が必要であるとする結果を示した。既にモータリゼーションの進展等により、利用者数の減少に見舞われていた上田交通において、運行継続のため多額の投資をすることは困難であったため、存続・廃止問題が浮上することとなった。別所線のこの事態を受け、上田市は同年末に向

¹ 国土交通省『鉄道統計年報(平成26年度)』

こう 3 年間の公的支援や大幅な税の補助などを行うことを決定し、また国からの援助もなされた。2005(平成 17)年 10 月には、別所線について経営の透明化を図るため上田交通より分社化がなされ、新しく誕生した上田電気鉄道の所属となった。2010(平成 22)年には「上田電鉄別所線の運行に関する協定」を締結し、継続して別所線への支援が決定された。以後も数年毎に同様の協定が締結され、継続して別所線への公的支援がなされ路線は廃止を免れている。

③考察

別所線の廃止が回避された要因として、数多くの公的支援を上げることもできるが、特に着目したいのは沿線自治体・住民の活動である。具体的には、沿線の温泉地である別所温泉の旅館組合による回数券の購入や、上田市役所内に「別所線電車存続期成同盟会」を設置し、パークアンドライドの実施や写真撮影会の実施などを行い、その様子を web サイト「別所線にのろう！」²による周知を行う等がある。さらに沿線の商店街や商業施設と協力し、一定金額以上の買い物で切符の贈与を行うなどの試みもある。このように沿線による存続に向けた取り組みは非常に大きなものとなっており、予想されていた利用者数の現象に歯止めをかけるだけでなく増加させることにもなり着実に成果を出している(表 1 参照³)。

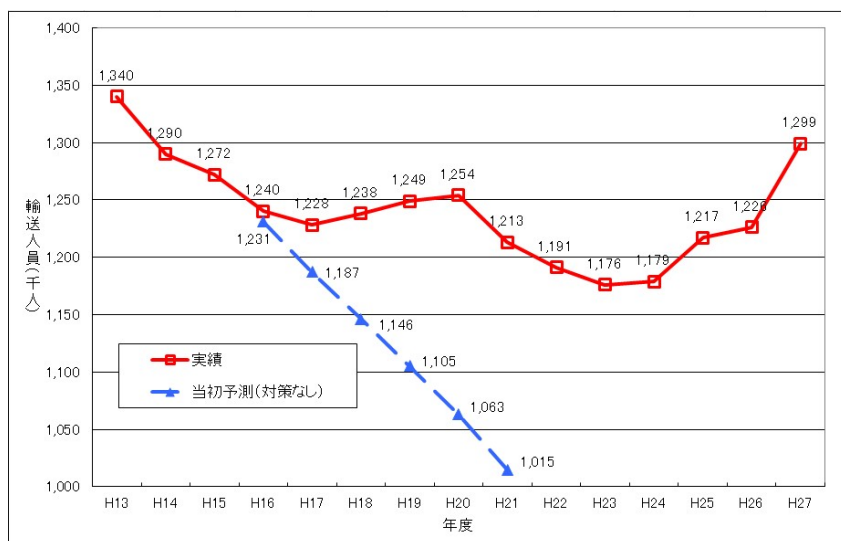
² 上田市「別所線にのろう！」

<http://www.city.ueda.nagano.jp/besshosen/index.html>

³ 上田市「別所線の現状」

<http://www.city.ueda.nagano.jp/ipro/besshosen/genjo.html>

以上のような「草の根」的運動により路線への支援意識が醸成され、それが会社側にも影響を与えることとなった⁴。結果として沿線地域・住民、行政、会社の三者の存続に向けた協力を容易なものとし、廃止問題浮上以後現在に至るまで継続する路線応援運動を展開することができていると考えられる。



図表 1 輸送人員の推移

3. 事例②長野電鉄屋代線

①路線概要⁵

所属：長野電鉄 路線長：24.4 キロ

⁴ 上田電鉄側の発言から、「市民の活動は、存続への意思の表れだと思います。(中略)会社もその気持ちに応えようと思います」とあるように、市民運動が会社の意識の変化に影響を与えていることが分かる。(発言の引用：古平浩(2012)「別所線存続運動における市民協働の方向」『信州自治研』長野県地方自治研究センター,239 巻,pp7-12)

⁵ 長野電鉄(2012)『ありがとう・さようなら屋代線』長野電鉄株式会社

区間：屋代～須坂間 駅数：13 駅 廃線対象区間：全線

②廃止問題の経緯

戦前では生糸の、戦後ではりんごや鉱石の輸送が盛んであり、さらに上野から屋代経由で湯田中まで直通する列車が毎日運行するなど、貨客共に盛んに利用され沿線地域の発展に寄与していた。しかしながら昭和 40 年代をピークに利用者数は減少していった。利用者数減少に苛む中、2007(平成 19)年には当年度までの累積赤字が 50 億円、当年度の経営損失が 1.8 億円、さらに今後 10 年間で設備投資などに 30 億円必要であるとする報告がなされ、廃止問題が浮上した。2009(平成 21)年には地域公共交通の活性化及び再生に関する法律⁶の下、「長野電鉄活性化協議会」が設置され路線存続への道が模索され始めた。協議会は最終答申で「長野電鉄屋代線総合連携計画」を策定し、屋代線でパークアンドライドやサイクルトレインなどの社会実験を 3 年間実施することが決定された。同時に沿線自治体による駅へのパネルの設置など独自の利用促進運動が展開された。しかし実験開始から 1 年ほど経過した 2011(平成 23)年に、協議会内の多数決で屋代線の廃止およびバス転換が可決され、2012(平成 24)年 4 月に全線廃止された。

③考察

「長野電鉄屋代線総合連携計画」により 3 年間の社会実験が決定されていたにも関わらず、1 年ほどで切り上げられ廃線へと向かった。実験の行われた 1 年間で、自治体独自の取り組みもあり約 1 割の利用者数増加を果たしていた⁷。成果を出していながらも、協議会の多数決で廃止されてしまったのは何故であろうか。おそらく、協議会内での各自治体代表者間の意思疎通がなされていないことが

⁶ 法令データ提供システム「地域公共交通の活性化及び再生に関する法律」
<http://law.e-gov.go.jp/cgi-bin/strsearch.cgi>

⁷ 小林隆夫(2011)「突きつけられた屋代線の危機—《住民自治》のスタディです」『信州自治研』229 巻,pp8-11

とがひとつ要因として挙げられるだろう。そもそも屋代線の廃止問題の浮上が、「急に持ち上がった話であり、行政をはじめ沿線の関係機関や地元の自治会等にとっては寝耳に水のような出来事であった」⁸と言われるほどのことであった。そのため問題解決のために現状認識から始めるような事態であり、総じて路線への関心が低い状態であった。そういった中、各自治体間で意思疎通を図り路線存続といった1つの目標に向け歩調を合わせることは困難であっただろう。

また周辺自治体の合併といったことも見逃せない。沿線自治体の多くは、既に「昭和の大合併」⁹とその後に長野市へ編入合併されているが、旧屋代町があった更埴市は「平成の大合併」¹⁰時に周辺自治体と新設合併し千曲市へ、また長野市では2005年と2010年に相次いで周辺自治体の編入合併が起きた。このことで長野市などの大きな自治体が、より多くの地域から構成されるようになり、沿線自治体の立場の相対的低下をもたらし、路線廃止問題が軽視されることとなった。屋代線の事例で言えば、廃止決定後に沿線が市議会に請願書を出し、地元議員による存続に向けた前向きな議論も起こった。しかし、他地域の議員から「特定の地区のために多額の税金を投入して良いのか」¹¹という声が上がリ、全市的な動きとすることができなかった。つまり、沿線とそうでない多くの地域が1つの大きな自治体にまとめられることで、同一市内であっても問題への態度に温度差を生み出すこととなり、世論を存続へと導くことができなかつたと考えられる。

4, おわりに

⁸ 古平浩(2011)「長野電鉄屋代線存続問題と長野電鉄活性化協議会」『信州自治研』229巻,p2

⁹ 沿線自治体に関して、1959(昭和34)年に綿内村・川田村・保科村が合併し若穂町となり、1966(昭和41)年に若穂町や松代町などが長野市に新設合併された。

¹⁰ 平成17年に大岡村・豊野町・戸隠村・鬼無里村が、22年に信州新町・中条村がそれぞれ長野市に編入合併された。

¹¹ 『朝日新聞』2011年9月1日朝刊

当然のことであるがこれまで第 2 部で扱ってきた JR 各社と比較して、地方中小私鉄の場合経営規模も格段に小さく、地域も非常に限定的である。本稿で見えてきた事例の 2 社も同様であるが、そうであるからこそ存続・廃止問題に大きな影響を与えることのできるものとして住民による運動を挙げることができるだろう。別所線の存続については上田市をも巻き込んだ「別所線電車存続期成同盟会」が大きな役割を果たし会社にまで影響を与え、廃止されたものの屋代線の事例においても沿線自治体による独自の取り組みにもより利用者数の増加に一役買っていた。

また合併がプラスの要因にもマイナスの要因にもなりうることがわかった。第 2 部の名松線の事例では、沿線自治体が津市に合併されたことで財政面に良い影響を与えたというプラスの要因として捉えられていたが、屋代線の事例では「一地域の問題」として捉えられるようになり、問題が軽視されることとなったというマイナスの要因として捉えた。

先にも述べたが経営規模の違いや限定された地域など JR 各社の問題と同様に捉えることはできないと考えられる。しかし存続・廃止問題を地方中小私鉄という異なる視点から検討することで、新たな要因を本稿で見いだせたのではないだろうか。